The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	万葉集の「譬喩歌」
Author(s)	井手, 至
Citation	語文. 1983, 42, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

万葉集の「譬喩歌」

井手　至

一

万葉集には、「雑歌・相聞・挽歌」の三大部立のほかに、「譬喩歌」の部立が設けられた巻巻があるが、万葉集にはじめて「譬喩歌」の部立が設けられたのは巻三である。そして、巻三に「譬喩歌」の部立を置いたのは、大伴家持であろうと推定されている。[注1]

さて、万葉歌の譬喩表現は、前稿[注2]にも述べたように、譬喩の媒体・主意・譬喩行為を表わすことばからなる直喩と、譬喩の媒体・主意の二つを表現する隠喩と、譬喩の媒体だけを表現する寓喩との三種に分類することができる。[注3]このうち、大伴家持が万葉集（巻三）に「譬喩歌」の部立を設けて収録している譬喩歌は、すべて第三の寓喩の歌であった。寓喩の歌は現場や文脈に依存する度合の大きい暗示的な譬喩であるから、『毛詩』大序、鄭箋に、風（寓喩）について「風化風刺、皆謂二譬喩不二斥言一」と言っているのに符合する。前稿には、巻三の「譬喩歌」がすべて寓喩歌であることを説いたが、万葉集には、他の巻巻にも「譬喩（歌）」の名のもとに分類された歌が存在する。すなわち、万葉集には、巻七・十三・十四に、部立名としての「譬喩歌」が、巻十一に、古今相聞往来歌の下位分類としての「譬喩」が、また巻十に、「雑歌」及び「相聞」の部立のもとに「譬喩歌」がある。以下に、問題の少いものから、順次、その譬喩のありかたについて見てゆくことにしよう。

まず、巻十の「譬喩歌」であるが、それぞれ「雑歌」「相聞」の部立の歌の中に

1 我がやどの毛桃が下に月夜さし下心よしうたてこの頃
（巻十・一八八九、春雑歌）

2 橘の花散る里に通ひなば山霍公鳥とよもさむかも
（巻十・一九七八、夏雑歌）

3 祝（はふり）らが斎ふ社のもみち葉も標縄越えて散るといふものを
（巻十・二三〇九、秋相聞）

の三首がある。1の歌は、宴席で歌われた歌であろう。宴歌として「雑歌」に収められたわけである。そして寓意のこもる歌であることは明らかであるが、諸注釈書にもいうように、その寓意がはっきりしない。新潮集成の頭注はその一試案を示したものである。2も宴席で披露されたものであろう。女のもとにしばしば通って行ったら世間がうるさく騒ぎたてるであろうかとの寓意をもつ歌。3は、たとえ親の監視がきびしくても、逢ってほしいと寓喩でもって女に

促した歌である。以上三首とも寓喩の歌である。

次に、巻十三の「譬喩歌」は、

しなたつ　筑摩さのかた　息長の　遠智の小菅　編まなくに
い刈り持ち来　敷かなくに　い刈り持ち来て　置きて　我れを
偲はす　息長の　遠智の小菅　（巻十三・三三二三）

の一首である。この歌についても、諸注釈書は、これを寓喩の歌として解する。すなわち、妻として添い遂げる気持もないのに、浮気心から女をもてあそぶ男を非難する寓意をこめた歌と考えてよかよう。

次に、巻十一の「譬喩」の歌十三首について、このうち、

(1)紅の濃染めの衣を下に着ば人の見らくにほひ出でむかも
（巻十一・二八二八、寄衣喩思）

(2)衣しも多くあらなむ取り替へて着ればや君が面忘れてある
（巻十一・二八二九、寄衣喩思）

(3)梓弓弓束巻き替へ中見さしさらに引くとも君がまにまに
（巻十一・二八三〇、寄弓喩思）

(4)みさご居る洲に居る船に夕潮を待つらむよりは我れこそまされ
（巻十一・二八三一、寄船喩思）

(5)山川に筌を伏せて寄りもあへず年の八年を我がぬすまひし
（巻十一・二八三二、寄魚喩思）

(6)葦鴨のすだく池水溢るとも儲溝の辺に我れ越えめやも
（巻十一・二八三三、寄水喩思）

(7)真葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも我がなけなくに
（巻十一・二八三五、寄草喩思）

(8)三島菅未だ苗にあり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠
（巻十一・二八三六、寄草喩思）

(9)み吉野の水隅が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや
（巻十一・二八三七、寄草喩思）

(10)かくしてやなほや守らむ大荒木の浮田の社の標にあらなくに
（巻十一・二八三九、寄標喩思）

(11)いくばくも降らぬ雨ゆゑ我が背子が御名のここだく滝もとどろに
（巻十一・二八四〇、寄滝喩思）

の十一首については、いずれも素直にこれを寓喩歌と認定することができると思う。すなわち、(1)の歌は、浮気の相手の女を「紅の濃染めの衣」に譬え（「紅の濃染めの衣」は浮気の相手の女の寓喩の意。以下同じ。）、人に見破られはしまいかとの寓意をもつ男の歌、(2)の歌も、やはり浮気の相手の女を「衣」に譬え、浮気な夫に寓喩でもって嫌味を言った妻の歌で、共に「衣に寄せて思ひを喩へ」た寓喩歌といえる。(3)の歌は、「寄弓喩思」とあり、第三句の意味がはっきりしないが、第一句「弓束巻き易へ」、第四句「後に引く」はどちらも男女間のことを弓のことに寓喩した表現である。(4)の歌は、相手を「洲に居る船」に譬え、あなたが私を待つ気持よりも私があなたを待つ気持の方が強いの意を、寓喩を交えて述べた歌、(5)の歌は、女を「魚」（左注）に譬え、母親の目をかすめてその女に逢い続けてきたことを寓喩した男の歌、(6)の歌は、自分の恋心を「池水」に譬え、決して別の女に心を移したりしないの意を寓喩を交えつつ誓った歌となっている。

そして、(7)以下の三首は「草」に寄せた寓喩歌で、(7)の歌は、女を「小野の浅茅」に譬え、本気で私から奪い取ろうとする者はあるまいとの意を寓喩を交えて述べた男の歌、(8)の歌は、年頃にならない

少女を「三島菅」に譬え、そのうちにと思っている間に自分と結婚できなくなってしまうのではなかろうかとの寓意を述べた男の歌、(9)の歌は、女が自分自身を「水隅が菅」に譬え、正式に結婚する気もないのにもてあそんだあげく、捨てようとする男を非難した女の寓喩歌である。また、(10)の歌は、男が自分自身を「標」に譬え、いつまでも結婚を許されぬ男の嘆きを寓喩を交えて述べた歌、(11)の歌は、それほど逢ってもいないのに、相手の男の名が世間に響きわたることを、雨によって水嵩の増した滝のとどろきに譬えた寓喩を交えて述べた歌である。

ところで、次の二首、

①大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものをならずはやまじ

（巻十一・二八三四、寄菓喩思）

②川上に洗ふ若菜の流れ来て妹が当りの瀬にこそ寄らめ

（巻十一・二八三八、寄草喩思）

については、往々、寄物陳思歌と解されることがある（①については沢瀉注釈など、②については岩波大系など）が、①の歌は、女を「毛桃（菓）」に譬え、しげしげと言い交した仲なのだから正式の結婚まで漕ぎつけずにはおかないとの決意を寓喩を交えて言い表わした歌と解せられ、また、②の歌については、総釈にも説くように、全体を譬喩表現と見て、男が自分自身を「若菜（草）」に譬え、女に寄り添いたいと願う寓意をこめた歌と解すべきであろう。以上、巻十一の「譬喩」の歌もすべて寓喩の歌と見て通じるように思われる。

二

さて、次に巻七に移るが、巻七には、「譬喩歌」の部立の中に含まれない歌、たとえば、「雑歌」の部立の中の「問答・臨時」などの項の歌に

佐保川に鳴くなる千鳥何しかも川原をしのひいや川上る

（巻七・一二五一、問答）

人こそばおほにも言はめ我がここだしのふ川原を標結ふなゆめ

（巻七・一二五二、問答）

時ならぬ斑の衣着欲しきか島の榛原時にあらねども

（巻七、一二六〇、臨時）

山守の里へ通ひし山道ぞ茂くなりぬる忘れけらしも

（巻七・一二六一、臨時）

西の市にただ一人出て目並べず買ひてし絹の商じこりかも

（巻七・一二六四、臨時）

など、寓喩の歌が散見する。一方、「譬喩歌」の部立の中の歌にも寓喩以外の譬喩の歌が見いだされることは前稿にも述べたところであり、次の一首

三国山木末に棲まふむささびの鳥待つごとく我れ待ち痩せむ

（巻七・一三六七、寄獣）

は、そこに、譬喩の媒体・主意・譬喩行為を表わすことばが見え、直喩の歌となっている。

そこで、今、前稿に取り上げて解説した歌をも含めて、巻七の「譬喩歌」の部立に所収の歌の譬喩のありかたについて考察した結果を示すとすればおよそ次のようになろう。紙幅の節約のため、細かい用法に関する考証は抜きにして結論だけを述べる。

一二九六（寄衣）…「衣」は少女の寓喩。その女との結婚を期す

る男の気持を寓喩を交えて述べた歌。
一二九七（同右）…「衣」は女自身の寓喩。男と結ばれることを望みつつ、契りを結べば人目につくことを恐れる気持を寓喩を交えて述べた歌。
一二九八（同右）…「麻衣」は相手の寓喩。人の噂を気にせず、つき合いを続ける決意を寓喩を交えて述べた歌。
一二九九（寄玉）…「白玉」は美女の寓喩。美女を得ようとして世間の噂の種にされぬようにせよとの意を寓喩を交えて述べた歌。
一三〇〇（同右）…「遠近の磯の中なる白玉」はあちらこちらの女たちの寓喩。こっそりその女たちとの遊びに耽ろうと述べた男の歌。
一三〇一（同右）…海神の「玉」は深窓の女の寓喩。その女に執心して近付こうとするさまを寓喩によって述べた歌。
一三〇二（同右）…海神の「玉」は深窓の女の寓喩。その女に執心して男が言い寄るさまを寓喩によって述べた第三者の歌。
一三〇三（前歌の答歌）…親の同意が得られず、意を遂げられない嘆きを寓喩を交えて述べた男の歌。
一三〇四（寄木）…「木の葉」は相手の寓喩。秘めたる恋心が相手に通じることを願う気持を寓喩を交えて述べた歌。
一三〇五（同右）…「人国山の木の葉」は人妻の寓喩。その人妻に横恋慕することを述べた歌。
一三〇六（寄花）…「花」は女の寓喩。女を垣間見て執心するさまを寓喩を交えて述べた歌。
一三〇七（寄川）…「川」は恋路の寓喩。恋路を遮られて逢えぬことを寓喩によって女に告げた歌。
一三〇八（寄海）…「大海をさもらふ港」は世間の噂を気にする女の家の寓喩。事が起った際の男の決意のほどを問い訊した女の歌。
一三〇九（同右）…「海」は世間の寓喩。今後の行動を男の判断に委ねるとの意を寓喩を交えて示した女の歌。
一三一〇（同右）…「小島の神」は母親の寓喩。その監視のきびしさゆえに逢えないのだと寓喩を交えて弁解した男の歌。
一三一一（寄衣）…「橡の衣」は身分の低い女の寓喩。その女が無難と聞いて結婚を希望する気持を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三一二（同右）…「なれにし衣」は古馴染の女の寓喩。その女をあらためて正式の妻に迎えようとする気持を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三一三（同右）…「衣」は女自身の寓喩。忍び妻が正式の妻に迎えられる際の世評を気にする気持を寓喩を交えて述べた女の歌。
一三一四（同右）…「橡の解き洗ひ衣」は昔馴染の女の寓喩。ある夕べ急にその女に逢いたくなって寓喩を交えて述べた男の歌。
一三一五（同右）…「下衣」はわが妻の寓喩。十分品定めもせず結婚したつまらない女だとの意を寓喩によって謙遜して述べた男の歌。
一三一六（寄糸）…「河内女の手染めの糸」は意中の男の寓喩。片思いではあるが絶えず思いを寄せているゆえ、仲が絶える

ことはあるまいとの意を寓喩によって述べた女の歌。
一三一七（寄玉）…海底に「沈く白玉」は深窓の女の寓喩。その女を是非わが妻にしたいとの執心を寓喩によって述べた歌。
一三一八（同右）…水底に「沈ける玉」は深窓の女の寓喩。男が何度も言い寄るさまを寓喩によって述べた第三者の歌。
一三一九（同右）…大海の底に「沈く玉」は深窓の女の寓喩。その女を正式の妻に迎えようとする気持を寓喩によって述べた男の歌。
一三二〇（同右）…「水底に沈く白玉」は深窓の女の寓喩。その女への執心を告げた男の歌。
一三二一（同右）…「白玉の緒」は夫婦の絆（きずな）の寓喩。それの絶えたことを世の中の常かと嘆く女の歌。
一三二二（同右）…伊勢の「海人の島津が鰒玉」は鄙の美女の寓喩。結婚後も一層恋情がつのるのであろうかと寓喩を交えてその執心を述べた男の歌。
一三二三（同右）…海底の「奥つ白玉」は深窓の女の寓喩。その女に執心する気持を述べた男の歌。
一三二四（同右）…「玉の緒」は夫婦の絆の寓喩。堅く契った仲だと知ればそれを割（さ）こうとする者はないはずだと寓喩を交えて女に諭した男の歌。
一三二五（同右）…「白玉」は妻自身の寓喩。全然顧みてくれない男を寓喩を交えて非難した妻の歌。
一三二六（同右）…「照左豆が手に巻き古す玉」は人妻の寓喩。その人妻に執心する気持を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三二七（同右）…海底の「奥なる玉」は深窓の女の寓喩。その女をわが妻に迎えるまで邪魔が入らぬよう願う気持を寓喩によって述べた男の歌。
一三二八（寄日本琴）…「膝に伏す玉の小琴」は男の愛する女の寓喩。妨げが入ったため、その女への執心をつのらせる男の歌。
一三二九（寄弓）…「吾田太良真弓」は女の寓喩。女を誘いたいが人の噂が気になることを寓喩を交えて述べた男の歌。
一三三〇（同右）…「細川山に立つ檀」は女の寓喩。結婚するまでその女を人目に触れさせたくない気持を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三三一（寄山）…「岩畳畏き山」は身分の高い女の寓喩。身分ちがいを意識しつつ魅（ひ）かれる気持を述べた男の歌。
一三三二（同右）…「岩が根凝しき山」は身分の高い女の寓喩。その女のもとに通いそめ、その虜になってしまったことを寓喩によって述べた歌。
一三三三（同右）…「山」は幼馴染の女の寓喩。その女に今あらためて心魅かれる気持を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三三四（同右）…「奥山」は身分の高い女の寓喩。その女への執心を寓喩を交えて述べた男の歌。
一三三五（同右）…「畝傍の山」は人妻の寓喩。執心のあまり人妻を横取りしてしまったことを寓喩を交えて告白した男の歌。

以上で、ちょうど、巻七の「譬喩歌」のうち四十首について見てきたことになるが、このあたりで、巻七の「譬喩歌」の部立に収集された譬喩歌の譬喩表現のありかたが類型的に把えられるように思われる。すなわち、巻七の「譬喩歌」に所収の歌は、

甲型　「何」は何の寓喩。何何すること（さま・気持）を（譬喩を交えず直接に）述べた歌。（一三〇〇・一三〇八・一三二〇など。）

乙型　「何」は何の寓喩。何何すること（さま・気持）を寓喩を交えて述べた歌。（一二九六・一二九七・一二九八など。）

丙型　「何」は何の寓喩。何何すること（さま・気持）を寓喩によって述べた歌。（一三〇一・一三〇二・一三〇七など。）

のような説明によって律せられる甲・乙・丙の三つの型にまとめることができよう。

そこで、巻七の「譬喩歌」所収歌の残りについても、これに倣って類型化するとすれば、

甲型＝一三四五・四九・八五・九二・九三・九五

乙型＝一三三六―三八・四〇・四一・四三・四四・四六―四八・五〇・五二・五四・五六・五九・六三―六五・六八―七〇・七二・七六―七九・八一―八四・八八・八九・九一・九四・九六・九七・一四〇〇・〇一

丙型＝一三三七・三九・五一・五三・五五・五七・五八・六一・六二・六六・七一・七三・七四・八〇・八六・八七・九〇・一四〇二・〇三

となる。なお、右のほか、一三六七は既述のように直喩の歌であり、一三七五は左注に譬喩歌でないと断ってあるので省くとして、一三七〇・一三九八・一三九九の三首が右の三つの類型のいずれにもにわかには入れ難い歌として省かれている。

三

そこで、次に、前節の考察で省かれた三首について検討しよう。その三首の歌は

ⓐ息の緒に思へる我れを山ぢさの花にか君が移ろひぬらむ　（巻七・一三六〇、寄花）

ⓑささ波の志賀津の浦の船乗りに乗りにし心常忘らえず　（巻七・一三九八、寄船）

ⓒ百伝ふ八十の島みを漕ぐ船に乗りにし心忘れかねつも　（巻七・一三九九、寄船）

であるが、ⓐの歌については、前稿で、「山ぢさ」がしぼみやすい花なので、移ろいやすい物を譬喩する媒体として持ち出されたものと見て「山ぢさの花にうつろふ」を隠喩表現と解釈しておいた。しかし、巻七の「譬喩歌」所収の歌が前節に考察したように、殆んど寓喩歌であるとするならば、ここで再考の必要性が感じられる。すなわち、「山ぢさの花」が移り気な仇し女を寓喩する媒体として、この歌に表現せられたものと見れば、一首は十分寓喩の歌として通用するからである。つまり、前節の乙型の寓喩歌と見て、私がこんなに思っているのに、あなたは仇し女に心を移してしまったのですか、と寓喩を交えて男をなじった女の歌と解するのである。

次にⓑⓒの歌に移るが、この二首については、ⓐの歌のようにストレートに寓喩の歌と見てしまえるかどうか、いささか疑問である。しかし、この二首を寓喩歌と解し得るかどうかを考える際に参考になるのは、ⓑの歌と表現形式の類似する次の歌、

A奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも

（巻三・三九七、譬喩歌）

が、やはり巻三の「譬喩歌」の部立の中に見いだされることである。このことは、まずⓑの歌と寓喩歌と見ようとする考え方に光明を与えてくれる。Aの歌の上四句の「…結びし」までは、

大海の底を深めて結びてし妹が心は疑ひもなし

（巻十二・三〇二八、寄物陳思、寄海）

の上三句とほぼ同じことを言い表わしたもので、深く契りを交したことを暗示する寓喩と考えられ、一首全体は、そのような心を忘れようとしても忘れられない、と結んだ歌となる。ところで、このような形式をもつ歌は、寓喩歌ではないけれども、まだほかにも見え、

B肥人の額髪結へる染め木綿の染みにし心忘らえめやも

（巻十二・三〇四七、寄物陳思）

C我が母の袖もち撫でて我がからに泣きし心を忘れせぬかも

（巻二十・四三五四、防人歌）

はその例といえよう。

新潮集成は、ⓑⓒの歌において、いずれにも「乗りにし心」と詠まれていることから、それと

東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗りにけるかも

（巻二・一〇〇）

ももしきの大宮人は多かれど心に乗りて思ほゆる妹

（巻四・六九一）

などの歌に見える「心に乗る」という表現との関係を認め、ⓑの歌を「楽浪の志賀津の岸で舟に乗り込んだように、妻がしっかりと乗りかかったこの心よ…」と口訳し、ⓒの歌を「多くの島島をめぐって漕ぐ舟に乗るように、妻がしっかりと乗りかかったこの心よ…」と訳して二首を共に寄物陳思歌と解釈した。しかし、集中に、ABCのような例が見いだされることからいえば、そのような口訳は必ずしも正鵠を得てはいないのではなかろうか。もしそうだとすればⓑⓒ二首の上四句は、一体どのような譬喩表現となっているのであろうか。

まず、ⓑの歌について、おおかたの注釈書は、第三句の「船乗りに」までを第四句の「乗りにし」を起す序詞と解するのであるが、この点は、如何であろうか。上代には

天香山之五百津真賢木矣、根許士尓許士而（自と許下五音以音）……

（記、上）

天飛む（だ）軽の少女　いた泣かば　人知りぬべし　波佐の山の

鳩の　斯多那岐尓那久（ゑ）

（記、下・八三）

道の辺の草深百合の花咲みに咲（ゑ）ましからに妻といふべしや

（巻七・一二五七）

霍公鳥聞けども飽かず網取りに取りてなつけな離れず鳴くがね

（巻十九・四一八二）

の傍線部分のような表現が見いだされる。だとすれば、ⓑの歌の第三・四句についても、「船乗りに乗る」という表現を考慮すべきではなかろうか。「船乗り」という語は、船出するために乗船することの意で、万葉集にも用いられており、

熟田津に船乗りせむと……

（巻一・八）

たなばたし船乗りすらし……

（巻十七・三九〇〇）

などはその一例である。第二句の「志賀津」は琵琶湖に面する滋賀の大津港をさすから、ここでⓑの歌の譬喩の媒体としての上四句の意味は、大海（琵琶湖）に漕ぎ出そうと大津の海岸で船に乗り込ん

だその心、の意となるであろうが、これはいかなる主意を譬喩したものとなるであろうか。

万葉集に詠まれた譬喩歌においては

大海をさもらふ港事しあらばいづへゆ君は我を率ゐがむ

（巻七・一三〇八、寄海）

風吹きて海は荒るとも明日と言はば久しくあるべし君がまにまに

（巻七・一三〇九、寄海）

の二首を見ればわかるように、「海」は世間を譬喩する媒体として用いられた。ⓑの歌には「海」という語は用いられていないが、「志賀津」から船に乗って漕ぎ出すところは近江の海（琵琶湖）であり、そこは恐しい大海と考えられていた。同じ「譬喩歌」の中に

近江の海波畏みと風まもり年はや経なむ漕ぐとはなしに

（巻七・一三九〇、寄海）

の歌に「近江の海波畏みと」とあることはそのことを証する。右の寓喩の歌においても、「近江の海」が相思の男女をとり巻く世間を寓喩したものであることはいうまでもない。かくて、ⓑの歌の上四句の主意は、相思の男女が意を決して世間という海に向けて乗り出すこと、つまり結婚に踏み切ったその時の気持、の意に解することができるのではないかと思われ、かたがた、この歌は、前節の乙型の寓喩歌ということになるのである。

次に、ⓒの歌についてであるが、この歌の場合も、上四句は寓意のこもる句と見られるのではなかろうか。集中に、

百伝ふ八十の島みを漕ぎ来れど阿波の小島は見れど飽かぬかも

（巻九・一七一一）

百隅の道は来にしをまたさらに八十島過ぎて別れか行かむ

（巻二十・四三四九、防人歌）

など、「八十島を漕ぎ来」「八十島過ぎて行く」の用例があり、また『古今集』にも

海の原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣船

（巻九・四〇七、羇旅）

のような表現が見られるように、「八十島漕ぐ」という表現には、当時の人々の意識では、長途の船旅に出るとの含意のあったことがわかる。したがって、ⓒの歌の上四句の譬喩の媒体としての意味は、多くの島々をめぐる船、つまり広い海原に漕ぎ出す船に乗り込んだ心、の意となるであろう。ⓑの歌の場合と同じように、いよいよ世間という大海に漕ぎ出す船に乗っかった心、の意である。すなわち、ⓒの歌では「船」は相手の男を寓喩したものと考えられるから、その主意は、男に従って結婚に踏み切ったその心、の意であると解することができよう。やはり前節の乙型の寓喩歌ということになる。

前節からの考察によって、巻七の「譬喩歌」所収の歌は、歌一首の表現の中に占める寓喩の割合こそ甲型・乙型・丙型で程度の差が認められはするが、一三六七番歌を除く一〇七首は、すべて寓喩の歌によって占められていることがわかった。

四

最後に、巻十四の「譬喩歌」の部立の歌の考察に入るが、東歌の「譬喩歌」には、古くから研究が行われてきたわりに、解釈上、問題を残す歌が多い。試みに、この方面に詳しい最近の注釈書二、三に当って、東歌の「譬喩歌」がどのように解釈されているかを見てみると、

歌番号	岩波大系	沢瀉注釈	新潮集成
三四二九	○	×	○
三四三〇	×	×	○
三四三一	×	×	○
三四三二	×	×	×
三四三三	○	×	○
三四三四	×	×	○
三四三五	○	○	○
三四三六	×	○	○
三四三七	○	○	○
三五七二	○	○	○
三五七三	○	○	○
三五七四	○	○	○
三五七五	×	○	○
三五七六	○	×	○

○＝寓喩歌と見る説。
×＝見ない説。

のように、東歌の「譬喩歌」は必ずしも寓喩の歌（○印）とは解されていないことがわかる。このうち

㋑志太の浦を朝漕ぐ船はよしなしに漕ぐらめかもよしこさるらめ
（巻十四・三四三〇、駿河国歌）

㋺薪伐る鎌倉山の木垂る木を松と汝が言はば恋ひつつやあらむ
（巻十四・三四三三、相模国歌）

㋩伊香保ろの沿ひの榛原我が衣に着きよろしもよひたへと思へば
（巻十四・三四三五、上野国歌）

㋥しらとほふ小新田山の守る山のうら枯れせなな常葉にもがも
（巻十四・三四三六、上野国歌）

㋭陸奥の吾田太良真弓はじき置きて反らしめきなば弦はかめかも
（巻十四・三四三七、陸奥国歌）

㋬あど思へか阿自久麻山の弓弦葉のふふまる時に風吹かずかも
（巻十四・三五七二）

㋣あしひきの山かづらかげましばにも得難きかげを置きや枯らさむ
（巻十四・三五七三）

㋠小里なる花橘を引き攀ぢて折らむとすれどうら若みこそ
（巻十四・三五七四）

㋡美夜自呂のすかへに立てる貌が花な咲き出でそねこめてしのはむ
（巻十四・三五七五）

㋢苗代の小水葱が花を衣に摺りなるるまにまにあぜか愛しけ
（巻十四・三五七六）

の十首については、それぞれ、㋑は、朝帰りの男をからかった寓喩歌、㋺は、恋心を抑えて色よい返事を望む男の寓喩歌、㋩は、相手の女の相性のよさを寓喩した男の歌、㋥は、女の容姿の不変を願った寓喩歌、㋭は、男がかまわないなら離婚も辞せずとの気構えを寓喩で示した女の歌、㋬は、のんびり男に少女と早く結婚するよう警告した寓喩歌、㋣は、またと得難い女に対する執心を寓喩した男の歌、㋠は、少女のあまりの幼さに手荒なことをしかねる意を寓喩によって述べた男の歌、㋡は、忍び妻に自重を求める男の寓喩歌、㋢は、女に馴染むにつれて情が湧いてくることを寓喩した男の歌、と見ることが許されよう。このほかの歌に関しては、新潮集成が「譬喩歌」所収の歌を寓喩の歌に解釈すべく努力しているが、それでも完全とはいえない。以下、先掲の表で、寓喩歌と見ない×印が二つ以上ある歌について、順次考察の対象としたい。

まず、新潮集成も寓喩歌と見ていない三四三二番歌の考察から始めよう。

足柄の我を可鶏山のかづの木の我をかづさねも門さかずとも
（巻十四、三四三二、相模国歌）

この歌について、岩波大系は、上三句を第四句の「かづす」を起す

序と見て、大意は「足柄の可鶏山の穀の木ではないが、私を誘って下さいな、穀の木を割かないでも」としているが、沢瀉注釈も、同様に、上三句を序詞と見て、「足柄のかけ山のかづの木ではないが、私をかどはかし誘ひ出して下さいな。どんなかどはかしになっても」と口訳している。これに対して、新潮集成は、第三句の「かづの木」を「男の譬え」としながらも、口訳は大同小異で、

足柄の、私を心に懸けようとする可鶏山のかづの木、その木の名のように、いっそ私をかどわかしてくれたらいいのにな。門口が締っていてもさ。

とする。この歌の第二句の「可鶏山」は所在未詳であるが、第三句の「かづの木」は、門の木の意、相模地方の方言であろう。ぬるでの木をさす。今日でも、この地方では、門神を祭るため、小正月の道祖神祭などにこの木を削って門口に立てる。[注4] 今もそれを「かつの木、お門棒」などと呼ぶ地方がある。この歌では、そのような習俗を反映して、「かづの木」を意中の男の寓喩の媒体として用いたものと思われる。とすれば、一首全体は、「足柄の、私を心に懸けるという可鶏山のかづの木が、いっそ私をかどわかしてくれたらいいのにな。たとえ門口が明いてなくっても。」と口訳すべきものと解され、男の誘いを待つ気持を寓喩を交えて述べた女の歌と見てよいのではないかと思われる。

次に、岩波大系・沢瀉注釈が、共に寓喩の歌として口語訳していない歌について見よう。まず

遠江引佐細江の澪標我れを憑めて浅さましものを

（巻十四・三四二九、遠江国歌）

の歌は、岩波大系（沢瀉注釈も）が、「……澪標のように頼みにさせて（私を信頼させて）…」と口訳し、上三句を第四句「頼めて」の序と解しているが、これではこの歌は寄物陳思歌と選ぶところがないことになる。ここは、やはり、新潮集成のように、上三句は相手を譬えた寓喩の媒体と見て、「…澪標（あの人）は私を安心させておきながら……。」の意に解すべきであろう。かくて、この歌は、寓喩歌として、自分を頼らせておきながら裏切った相手を懲らしめてやればよかったのに、という悔恨の情を詠んだ歌と見ることができる。次に

足柄の安伎奈の山に引こ船の後引かしもよここば子がたに

（巻十四・三四三一、相模国歌）

であるが、この歌も、大系・注釈とも、上三句を第四句「後引かし」の序詞のように口訳しているが、「船」は女のもとから帰る男を譬えたものと見て、後ろ髪を引かれるようにして朝帰りする男の寓喩歌と解してよいと思われ、また、

上毛野安蘇山葛野を広み延ひにしものをあぜか絶えやむ

（巻十四・三四三四、上野国歌）

の歌についても、大系・注釈は、上三句を第四句の「延ひ」を起す序と解したらしいが、やはり、これも寓喩歌で、このお互いの深い仲を続けて行こうとの決意を披瀝した男の歌と見るべきであろう。

かくて、巻十四の東歌の「譬喩歌」所収歌も、巻三の「譬喩歌」所収歌と全く同じく、すべて寓喩歌からなることがわかった。周知のように、巻十四東歌の編纂者の一人として大伴家持も擬せられているが、その部立が巻三・四と全く同じで「雑歌・相聞・挽歌・譬喩歌」から成ることからいっても、少くとも巻十四東歌の整理に家持の手が入っていることは確実といえよう。東歌の「譬喩歌」の部

立に収められた歌がいずれも寓喩歌であることも、そのことと無関係ではあるまいと私には思われる。

以上、数節に亘って縷説してきたところから明らかなように、万葉集の「譬喩歌」は、巻七の一例を除き、寓喩歌であるということになる。つまり、万葉集では、寓喩歌がすなわち譬喩歌として扱われたと言って過言ではない。万葉集の編纂資料となった種々の歌稿や、整備途上の巻々の歌の中から、寓喩歌を選別蒐集することによって、万葉集の「譬喩歌」の部立は成立したのである。

注1　伊藤博「譬喩歌の構造――大伴家持小論――」『国語国文』三三巻十二号、昭和三九年十二月など。

注2　拙稿「譬喩歌と縁語」『万葉集研究』第三集、昭和四九年。

注3　国立国語研究所『比喩表現の理論と分類』昭和五二年、その第一類と第二類と第三類とに当る。

注4　武田久吉『農村年中行事』昭和十八年、一二五頁―一二八頁など。